

にも草木を以て設置被申候得共、人物ともに四時の氣を受ずといふ事有べからず、雲行雨施は陰陽の氣亨通にて候。此亨通の氣天に無之候はゞ、人も禽獸も氣血流通無之、何とて形を流布可申候や、草木は此亨通の氣を、無情故外へ軽く受候故早速其驗も見え、又少しの早にも枯申候。人や禽獸は有情にて深く内へ受候故、外へあらはれ見え不申候得共、其代には大旱にても稿死すると申事は無之候。此段

貞齋へ申遣候得共、とくと同心無之候。貞齋は異説にて合点難仕候。此儀此度乍序申進候。七月廿日

一、室鳩巢辛亥中秋臥病思故人詩

家々絃管倚南樓。回首平原烟霧收。天下歡情鍾一夜。雲間明鏡照千秋。不須賓客對青眼。別有孀娥憐白頭。病臥茂陵如可起。來年應復從君遊。

秋風吹霧度關河。家住駿臺得月多。千樹滴光隨玉露。萬家倒影漾金波。何論衰髮白添白。笑問醉顏醜不醜。寄語西園飛蓋客。今宵無奈瘞人何。鳩巢老人室直湖。授筆于嚴靈之御廳。

一、上風下風

燒砒霜時。人在上風十餘丈外立。下風所近草木皆死。見

本草綱目石部砒石下。上風下風は吾俗所謂風上風下に同じ。孫子火攻篇。火發上風莫攻下風の一證を得。故に此に記す。

一、高野山僧侶反逆を謀る

元祿五年壬申紀州高野山僧侶謀逆。就中行入派非理の輩六百二十七人處遠流。此時の紀事本末卷五郎兵衛家にあリ。讀感記十二卷に見えたり。

一、遊夏不贊一辭の儀室鳩巢來狀

先生集書内

春秋屬辭比事の儀御申越候通と存候。勿論趙盾・許世・子止が事に不限候。頃日も存付候は、魯桓公即位三年迄は春王正月と有之、三年より末は桓の世を終るまで春王二字無之、何月何日と迄有之候。魯公子翬隱公の世を終て、翬とはかり出、桓に至て公子二字加はり申候。是等屬辭比事に候間、御褒貶の深意可有之存候。其邊はいまだとくと合点不仕候得共、是等を以て脱誤偶然と申候ては、聖人被加筆削遊夏不贊一辭の所は、何を以て見可申候や、委細筆紙に難盡候。已上。九月廿四日

副啓。頃日秋の富士圖に贊を頼申人有之、畫幅に題し申候。

忽疑東海富嶽。一朝飛入君樓。回首咫尺千里。白雲紅葉

共秋。始信筆力拔山。何翅夜半移舟。夜半移舟と申は。莊子に出申候。

又布袋の贊を頼申人有之、題し遣候。露頂濯々。巨腹便々。塊然趺坐。何等老禪。閉口一笑。百事俱廢。布袋布袋。汝是飯袋。

御慰に書付進候。方々より畫贊頼にて煩勞に候へ共、無餘儀申越且又閑中の慰にも罷成候故調遣申候。頓て死申候間、長く世に残り形見とも罷成と存候。以上。

十月三日

駿臺病叟

浚新兄几右

一、壬子元日口號二首

金城何處不迎新。誰問七旬羸五身。病與老期無起日。年兼臘去有歸春。榮跚難謁趙公子。箴藥未逢秦越人。寄語陽和相假借。猶堪對酒樂佳辰。

余近年病癯兩足俱廢。故第五句用平原君傳覽者事。

聞道天孫降紫微。日邊烏鵲五雲飛。臥家身負三千禮。戀主心欽咫尺威。正值新年添慶事。如何久病退朝衣。縱然海內逢知己。肯惜瘞人與世違。

一、室鳩巢試筆の詞

日月迭に移りて白駒の隙過やすく、衰病日に侵して黄金の術成がたし。されば犬馬のよはひ、是まであるべしとも思はざりしが、いつしか老の浪より來て、ことしは七十あまり五つの春にもなりぬ。あまさへちかきころより身に瘵疾を得て、手足もあがらず、起居もなやめるまゝに、昔の董生を學ぶとはあらねども、此三とせ春の園を窺ふ事もかなはねば、園の中ながら梢につたふ鶯の音に残りの夢をさまし、枕にかほる梅が香に過し昔を忍ぶばかりになんありける。しかはあれど、幸にわかかりし時より、學びの窓に年を経し甲斐ありて、程朱の道にしたがひて鄒魯の風を尋ね、韓歐が文を好て邯鄲の歩を學ぶにぞ、老の寢覺も慰みぬべし。さても多くの年月を経て、世の有様を考るに、盛衰榮枯たがひに行かふをば、夢とやいはん幻とやいはん。誠に富貴は浮べる雲のごとく、禍福は糾へる繩のごとしといへるに、なにかたがふ事あるべき。中にたゞ吾聖人の建て給へる三綱五常の道なん、天地と並び傳へ、古今のへだてなく、是ばかりはかはる事あるべからず。人として仰ぎ崇ぶべきはこの道ぞかし。然ども儒教世に行はれざりしよ